

梨の花

何年前だったか苗木を売りに来た男がいて、梨の木を一本買った。売りに来たのは中年の眼のぎよろりとした男で人相はよろしくないが、人相と植木は関係が無いから差支えない。男の牽いて来たリヤカアを見ると、柿とか桃とか杏とか果樹ばかり積んであった。何故果樹ばかり持っていたのか知らない。

庭に果樹は植えるものではないと聞いたことがあるが、植えて困るような庭ではない。尤も梨の木を買ったのは実を採るためではない。花を見るのが目的であった。昔、白楽天の「長恨歌」を読んで、梨花一枝春雨ヲ帯ブ、と云う一行を憶えた。かの有名な楊貴妃が蓬萊山で涙にくれるさまを歌った条りだが、生憎梨の花を見たことが無い。見たことが無いから傾国の美女が涙闌干と泣く姿がどんなものかよく判らなかつた。しかし、この一行が何となく気に入って記憶にあったから、梨の木を買ったのだと思う。春、梨の花が咲いてしとしと雨でも降ったら定めし風情があるだろう。梨を植えたら、早く花を見たい。

買った苗木は四、五尺の細くて貧弱な奴で、早く花を見たいと思っても相手は木だから此方の思う通りにはならない。その裡に枝も何本か伸びて、来年辺りは花が附くかもしれないと思っていたら、ある日、植木屋の親爺が来て知らない間に梨を刈込んでしまった。

——枝を切ったら花が咲かないだろう？

——ええ、だけど囲りの木が困るからね。それに碌な実は付きませんよ……。

実なんかどうでもよろしい、花が見たいのだと云うと親爺は変な顔をした。自分で植えた木でないせいか、親爺は梨に好意を持っていなかったようである。

何年経ったか忘れたが、ある春、梨の木にちらほら白い淋しい花が咲いた。花が疎

らなせいも余計淋しい。貧弱な花だが、兎も角咲いたから嬉しかった。夕暮、仄暗いなかに淋しい花が白く浮かんでいるのを見て独り酒を飲んだ。その淋しい花も夕暮に見ると多少は風情があったように思う。その後毎年花を附けたが、どう云うものか、いつもちらほら疎らで沢山花を附けたことは一度も無い。

或る日雨が降ったから楊貴妃を想い出して庭の梨の花を見たら、僅かばかりの花がしよんぼり雨に濡れていて期待に反すること夥しい。咲いてから何日か経っていたから、花も萎れかけていたかもしれない。何だか泣きべそをかいているようで、幾ら想像力を働かせても涙を含む美女の幽艶の風情なぞ求むべくも無かった。この梨の木は先年、家を改築するので移植したら枯死した。時期が悪かったのかもしれない。その前年胡桃ぐらいのちっぽけな実を三箇つけたが、それが梨の木の我家への最後の贈物であった。

(一九七三年三月)

文鳥

小鳥好きの某君に鶯が一羽欲しいと頼んで置いたら、暫くして某君が鶯を届けて呉れた。見ると某君は鶯の他にもう一羽小鳥を持って来ていて、

——これは、おまけです。

と云ってその小鳥を呉れた。何だ、十姉妹かい？と訊くと某君はこれは文鳥で、子供だからまだ黒い所があるが大人になると雪のように真白になる、嘴ももつと赤くなるのだと講釈して呉れた。ふうん、と聴いていたが、一向に感心しなかった。

第一、おまけですなんて云われると余り感心する気にはならない。買物をして、

おまけの品が買った品物より上等だと云うことはあり得ない。だから、その文鳥にもおまけとしての価値しか認めなかったかもしれない。

ほうほけきよ、と啼出すのを愉しみにしていたら、その後間も無く肝腎の鶯はころりと死んだから情無い。何故死んだか判らないが、死んだものは仕方が無いと諦めることにした。その結果、おまけの筈の文鳥が我家のなかで急に幅を利かすことになった。傍役が主役になったようなものだろう。

この文鳥は所謂手乗文鳥と云う奴だから、飼主の人間は同輩とでも思っているのか、当然遊び相手になって呉れるものと心得ているらしく、放って置くと相手をしろと啼くのである。手を出すと掌に乗って、序に肩迄上って来て耳の穴を啄いたりするから撥ったくて不可ない。

——こら、調子に乗るな。

文鳥をたしなめたら、ぴっ、ぴっと啼いて、首をひねると黒い眼で此方の顔を見た。どう云う料簡か知らない。

文鳥が淋しがるから人の姿の見える所に置いて呉れ、と某君が云ったから、文鳥の籠は居間兼食堂の食卓の上に載せてある。尤も鳥籠の戸は開けっ放しにしてあるから、文鳥は勝手に籠を出て食卓の上を跳ね廻って糞をしたり籠の上に乗って身体のあちこちを啄いたりしている。

一度、客が何人か来て隣の部屋で酒を飲みながら賑かに話していたら、廊下伝いに文鳥がぱたぱた飛んで来たから驚いた。仲間に入れて呉れと云うつもりでもあるまいが、賑かな所が好きらしい。ただ困るのは行儀が悪いことで、餌壺のなかの粟を矢鱈に食卓の上に散らす。仕方が無いから浅い大きな箱を置いて、そのなかに鳥籠を入れて置くことにしたが、箱のなかが粟だらけになってしまう。

以前からよく来る山鳩がいて、家の者が箱のなかに散らかった粟を庭に捨てる

喜んで啄む。この山鳩は悉皆馴れてしまつて、戸が開いていると平気で家のなか迄入って来る。以前は掌から麻の実を食つたこともあるが、このごろは面倒臭いからやらない。

或るとき山鳩が来て、庭の粟を食つてしまうと、もつと貰いたいと云う顔をして濡縁から食堂に上つて来た。文鳥の餌壺の粟を摘んで床に撒いてやったら、山鳩は忙しそうに啄んでいる。ひとつ、山鳩に文鳥を紹介してやろうと思ひ附いて、食卓の上にいる文鳥を山鳩の近くの床に降したら、最初は文鳥も面喰つたのか、ぴよんぴよん、その辺を跳ね廻っていた。

その裡に、山鳩の啄んでいる粟は自分の餌だと気が附いたのかどうか知らないが、文鳥は身体を脹らませると、自分の十倍以上もある山鳩に向つて威嚇するような恰好をしたから可笑しかった。そればかりか、山鳩に突掛つて行つたから、これには驚いた。山鳩は何だか迷惑そうな様子で逃げながら粟を啄んでいたが、文鳥の劍幕に呆れたのかもしれない。到頭食堂の外へ出て行つてしまった。

(一九七六年七月)

泥鰻

いつだったか、家の者が買物から帰つて来て、

——泥鰻を買つて来ましたよ。

と云つた。別に泥鰻が好物と云う訳では無い。買物に行つたら、珍しく売つていたから買つて来た、そんな話だつたと思う。何だか面白そうだから台所へ行つて流台を覗いたら、鬚を生やした黒い奴が大きな鉢のなかでくやくにや無闇に暴れて

いて取止が無い。柳川にすると云うから、間も無く此奴らも鍋のなかで往生するだろう。そう思ってみている裡に、何匹か池に放して見ようと云う気になった。

泥鰌に向つて、お前達のなかに鍋に入るより池に入りたい奴はいるか？ と訊くのが順序かもしれないが、そんなことは出来ない。仮に出来たとしても、みんな池の方を志願したら、鍋は出来ないし、小さな池は泥鰌だらけになって甚だ迷惑する。だからそんな順序は省略して、なかで威勢の好きそうな奴を四、五匹掴まえて庭の池に落したら、忽ち沈んで見えなくなつてしまつた。この四、五匹は運が好かつたと云つていいのか悪いのか、その辺の所はよく判らない。池には金魚が十匹ばかりいるが、金魚と泥鰌が喧嘩するかどうか、そこ迄考える必要も無い。

——泥鰌は泳いでいますか？

——影も形も無いな……。

何だかたいへんつまらぬことをした気になつた。

池は煉瓦のテラスに続いていて、深さは二尺も無い。なかは混泥土だが姫睡蓮の鉢が幾つか沈めてあるから、鉢の土が流れ出したり、長い間に土埃が溜つたりして底の方には二寸ばかりの泥の層が出来ている。泥鰌の奴は、これ幸いとその泥のなかに潜り込んでしまつたと見える。

最初の二、三日は気になつたから池を覗いて見たりしたが、泥鰌は一向に姿を現さない。娘が遊びに来て家の者と話している。池に泥鰌がいるのよ。ほんと、どれどれ……あら、見えないわよ。聞いていると、洵に莫迦な会話としか思えない。

友人と深川の泥鰌屋へ行つて、酒を飲んで泥鰌を食っている裡に、ひよっこり池の泥鰌を想い出した。そのくらいだから、池の泥鰌のことは悉皆忘れていたのだから。想い出した序に友人に話をしたら、泥鰌を飼つてるなんて、あんまり聞かないな、と莫迦にしたような顔をした。それから、

——「田舎教師」に泥鰻を食うことが出て来るね……。

と云い出したから面喰った。花袋の「田舎教師」は昔読んで知っているが、泥鰻が出て来たかどうか憶えていない。そうかい、泥鰻が出て来たかな？ 話を聴くと、何でも病身の主人公が滋養物を摂らなくちゃ不可ないと云うので、毎日泥鰻を割いて卵をかけて煮て食ったとか書いてあると云う。そう云われると、何だかそんな所もあったような気がするが、お前さんはよく憶えているなど感心したら、なかに、必要があつて最近読み返したばかりだと澄していた。案外、珍しく泥鰻屋に行こうと友人が提案したのも、そのせいだったかもしれない。尤も、「田舎教師」には植物の名前がよく出て来ると云うことから、いつの間にか植物の話になって、泥鰻は泥のなかに忘れられてしまった。

泥鰻を池に放して一年ぐらい経った頃かもしれない。或る日、夕立が降った。雨が歇んでから庭をぼんやり見ていると、土の上で何だか黒い物が跳ねている。何しろ泥鰻の奴はさつぱり姿を見せないから、池に泥鰻がいることも忘れていたのである。

——おいおい、あれは何だ。

家の者を呼んで訊くと、まあ、泥鰻だわ、と云う返事だたいへん驚いた。夕立で池の水が溢れたとき、外に流れ出たらしい。早速池に戻してやったが、生死不明の泥鰻がちゃんと生きていたと判つて、何だか悪くない気分であつた。

それからどのくらい経った頃か忘れたが、或る好く晴れた日、家の者が頓狂な声で呼ぶから行ってみると、池に泥鰻が見えた。泥鰻は一匹だが、ひよろひよろと垂直に立って、水面に顔を向けている。好い天気なのでふらふらと出て来たのかもしれない。見ていたら今度はくるりと一廻転して、またひよろひよろと尻尾を上にした儘下に消えてしまった。

——泥鰌って愛嬌があるのね……。

家の者は感心している。たかが泥鰌のことで頓狂な声を出すな、とたしなめるつもりでいたのだが、それを忘れたのは、泥鰌の愛嬌を認めたせいかしらん？

(一九七七年二月)

お玉杓子

去年の春、三月中旬頃だったと思うが、テラスのちっぽけな池に蝦蟇が初めて卵を産んだ。それ迄も庭に蝦蟇の姿を見掛けたことは何度もあったが、卵は産まなかった。何故去年から産み出したのか、それは蝦蟇に訊かないと判らない。

ちようど若い知人が訪ねて来て話をしてしていると、

——おや、親子蝦蟇だ。珍しいですね。

と相手が吃驚したような顔をした。見ると、いつの間に現れたのか、テラスの隅に二匹の蝦蟇が重なって凝っとしていた。小さな奴が大きな奴の上に乗っかっている。親子蝦蟇と聞いたら何だか可笑しかったが、或は若い知人は親亀の背中に子亀を乗せてとか何とか云う文句を知っていて、その連想から親子と云ったのかもしれない。

——うん、ああやって、朝からその辺を歩き廻ったり、池に這入ったりしているよ。

二人で蝦蟇を見ていたら、そこへもう一人の若い知人がやって来て、テラスの蝦蟇を見ると、

——交尾してますね……。

と面白そうな顔をした。二人の若い客は友達同志である。

——親子じゃないのか？

——夫婦ですよ。

——何だ、そうか……。

そんなことを云っている。それから暫くしてテラスを見たら、蝦蟇はどこへ行ったのか姿が無かった。

蝦蟇はそのそ歩いて鈍重な感じがするが、急に姿がみえなくなることがある。庭に蝦蟇を見掛けて、ああ、いるな、と思う。ちよつと傍らへ行つて、戻つて来て見るともういない。遠くに行つた筈は無い、とその辺を探しても一向に見附からない。忽然と消えてしまうから、何とも不思議でならない。忍術でも心得ているのではないかしらん？

それから、ひよつこり、思い掛けない時に顔を出すこともある。いつだったか、まだ庭の片隅に木苺の藪があつた頃だが、垂れた枝に紅い実が附いているから摘もうと手を伸したら、不意に指先を突かれた。見ると、蝦蟇の奴が偉そうな顔をして控えていたから吃驚した。突かれたと思つたが、或は舌の先で舐められたのかもしれない。蝦蟇がどう云う心算でそんなことをしたのか、さっぱり判らない。真逆、挨拶した訳でもあるまいと思う。

若い知人が訪ねて来た翌日、眼を醒したら家の者が蝦蟇が卵を産みましたよと云うから早速池を見に行つて、初めて蝦蟇の卵に御眼に掛つた。卵は直径二糎ばかりの寒天質の長い紐状をなしていて、そのなかに何やら黒いものが点点と見える。池のなかには姫睡蓮の鉢が幾つか沈めてあるが、卵はその鉢の一つの上にとぐるを巻いた恰好に堆く産んであつて、それでもまだ終らず隣の鉢の上にも山が出来ていた。紐がどのくらい長いのか、見当も附ない。何だか池のなかが汚らしくなつた。

ようで面白くなかったが、仕方が無いと諦めてその儘放置した。

それからどのくらい経った頃か忘れたが、気が附いたらちっぽけな池のなかはお玉杓子だらけになっていた。黒い小さな奴がうじゃうじゃしている。これがみんな一人前の蝦蟇になったら、一体どう云うことになるのだろうか？ そう考えたら、急に落ち着かない気分になった。蝦蟇も一匹か二匹見るのはいいが、狭い庭中蝦蟇だらけになって足の踏場も無い、そんなことになったらどうしたらいいのだろうか？ 見ている裡に、たいへん憂鬱になった。

その裡に小さな黒い奴に手足が出て、何となく蛙らしい恰好になって次々と池から出て行くのを見掛けた記憶はあるが、その後、庭で蝦蟇の子供に会ったことは一度も無い。幸にして庭中蝦蟇だらけにならずに済んだ訳だが、多分みんな死んだのではないかしらん？ 庭には四十雀とか数種の小鳥がしょっちゅう来ているから、小鳥共が啄んでしまったのではないかと思う。

今年は庭の花が去年より一週間か十日ばかり遅かったが、蝦蟇も矢張り去年より遅く三月下旬頃、二匹で姿を現した。尤も、小さな奴が大きな奴の上に乗っかってゐる恰好は変わらないが、去年と同じ奴かどうか知らない。テラスに這上ろうとして、何遍も重なった儘仰向けに引繰返るからみつももない。不要の煉瓦で段段を造ってやったら、今後はちゃんとテラスに上った。

目下、池には去年と同じようにお玉杓子が沢山泳いでいる。ときどき覗くが、庭中蝦蟇だらけになる心配は無いと高を括っているせいだろう。去年と違って安心して見ている。

(一九七八年四月)

巣箱

大分以前から庭の木の枝に竹筒が吊してあって、これに牛脂を入れてやると四十雀が来て飲んで啄む。四十雀は大抵夫婦で来て、一方が牛脂を啄んでいるときは、一方は近くの枝でちよんちよんと跳ねている。二羽で来るから夫婦と思っているが、どっちが亭主でどっちが細君か知らない。いつだったか、その識別法を誰かに聞いたことがあるが、酔っていたから直ぐ忘れてしまった。強いて知りたいとも思わない。

長い間、竹筒の牛脂は専ら四十雀が啄んでいたが、いつの頃からか、それ迄牛脂に見向きもしなかった雀や鶇が牛脂を食うようになったから、合点が行かない。或るとき、家の者が、

——雀が牛の脂を食べてますよ。

と云うから、そんな筈は無い、と庭の竹筒を見たら、雀がちよんちよんと乗って啄いていたから驚いた。もつと驚いたのは、鶇の奴が四十雀を追払って、竹筒を独占して偉そうな顔をしていたことである。

多分、四十雀が旨そうに食っているので、一体、どんな味がするものか試食してやろう、と思ったかどうか知らないが、案外それで味を占めたのではないかしらん？ 雀が相伴するのは愛敬だが、鶇となるとそうは行かない。長い鋭い嘴を牛脂の塊に突き刺して、丸ごと竹筒から抜いて持去ってしまう。無茶なことをするから甚だ迷惑する。

——この頃、直ぐ牛の脂が失くなくなると思ったら、そのせいね……。

と家の者も呆れていた。

鶇が牛脂を旨いと思っているかどうか判らないが、見ていると、鶇は四十雀の牛脂を攫って行くことに快感を覚えているように思われる。故意と意地悪をしているように思われて気に喰わない。この野郎、と鶇を追払ってもいいが、他の小鳥共が誤解す

ると不可ないから困る。

庭には餌台も造ってあって、以前はこの上に、山鳩や雀にやるために米粒やパン屑を載せてやった。或るとき、友人に教えられて向日葵の種を載せることにしたら、四十雀は牛脂より此方の方が好物と見えて、それからは向日葵の種を好んで啄むようになった。餌台に乗って一粒啜えると庭の茂みのなかに這入って、両足で種を押え付けて、忙しく啄いて固い表皮を割って中味を食う。

向日葵の種を置くようにしたら、これ迄見掛けなかった河原鶉も来るようになった。狭い庭の餌台の向日葵が、どうして河原鶉の眼に附いたのかさっぱり判らない。河原鶉は大抵五、六羽で来て、餌台に乗って遊んだり喧嘩したりしている。喧嘩して舞上ると、羽が緑色に透けてなかなか美しい。偶に鶉もこの餌台に乗って、何となく辺りを睥睨するような恰好をしているが、幾ら偉そうな顔をして見せても、鶉の嘴は向日葵の種を啄むようには出来ていない。それが面白くないのだろう、直にどこかへ行ってしまふ。

いつだったか忘れたが、庭に来る小鳥の話をしたら、その話を聴いた友人が巣箱を呉れた。何でも、その友人の知合の男の子が造ったとか云う話だったと思う。

——どうだ、素朴で良いだろう？

呉れるとき友人は自慢したが、成程、頑丈に出来た白木の巣箱で悪くなかった。早速、貫った巣箱を庭のヒマラヤ杉の幹に架けて、四十雀が巣を営むのを愉しみにした。巣箱に「貸家」と書いた紙を斜に貼りたかったが、そんなことをすると人が変に思うかもしれないから止めにした。

四十雀はどこでも簡単に巣を作るらしい。四十雀が新宿の或る百貨店の屋上にある石燈籠のなかに巣を作った、そんな記事を前に新聞で見たことがある。

信州追分の林のなかに別荘を持っている知人がいる。或る夏、この知人が別荘に行

つて、雨戸を開けようとするとか何か引掛るものがある。何だろうと覗いて見たら、四十雀が戸袋のなかに巣を作っていたそうである。その話を聴いたのは大分前のことだが、何だか林のなかの家が眼に見えるようで、愉快な気がした記憶がある。或る晩秋の一日追分へ行ったら、裸の梢で四十雀が賑やかに囀っていて、向うに浅間が大きく見えた、序にそんなことも思い出す。

石燈籠や戸袋に較べたら、巣箱の方が廻かに住心地は好いだろう。小鳥はどう思っているか知らないが、巣箱を架けた人間はそう思いたい。その裡に四十雀が何度か巣箱の上に乗って、穴からなかに這入ったりするのを見掛けたから嬉しかった。

——どうだい、この家？

——満更悪くないわね……。

二羽でそんな相談をしているように思われてならない。四十雀が巣箱に住着いて、雛でも孵したら申分無いのだがと思う。

或る日、何気無く巣箱の方を見たら、巣箱の上の枝に猫が一匹上っていて、凝っと巣箱の方を視ながら蹲居っていたから吃驚した。どうやら猫の奴は巣箱に出入する四十雀に眼を付けて、そこで待機していたらしい。腹が立つから、

——こらっ。

と怒鳴って庭に飛出したら、猫も面喰ったらしい、狼狽してヒマラヤ杉を駆降りると一目散に逃げて行った。余程大声で怒鳴ったのかもしれない。

——一体、何事ですか？

家の者が吃驚した顔で覗いた。

巣箱にばかり気を取られて、猫の存在を忘れていたのは、何とも迂闊であったと云う他無い。これでは貸家の札を貼っても、借手は無いだろう。四十雀だって莫迦ではないから、猫に狙われるような場所に家庭を持つなんて、真平御免と思うに相違無い。

果して、その年四十雀は巣箱に巣を作らなかった。その年ばかりではない、その後いまに至る迄、巣箱は空家の儘で塞ったことが無い。白木の巣箱は悉皆古ぼけてしまっているが、いまでは庭の点景みたいな気がするから、借手が無いからと云って取除くつもりは無い。

二、三年前の秋だったと思うが、一度、何となくヒマラヤ杉に梯子を駆けて、巣箱を外してみたことがある。なかで、ことん、と音がするから、何だろうと横にして振ったら、穴から団栗が一つ転り落ちたから驚いた。誰が入れたのかしらん？ 四十雀には団栗は大き過ぎて啜えられないから、案外悪戯者の鶉でも啜えて来て入れたのではないかと思う。何だか、思い掛けない秋の贈物を貰ったような気がして、愉快だったのを想い出す。

(一九七八年九月)